様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６３５０

研究課題名（和文）文学と美術の交流―小村雪岱の小説挿絵に関する研究―

研究課題名（英文）Interactions Between Literature and Art : A Study on KOMURA Sttai's Book Illustrations

研究代表者
新井　由美（ARAI, YUMI）

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：４０７５６７２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：小村雪岱が挿絵を提供した小説の初出一覧を作成した。特に、雪岱挿絵の代表作とされる邦枝完二作品における、挿絵と小説本文の関連性を綿密に調査・考察した結果、挿絵の典拠となる既存絵画の存在、舞台装置家としての視点を基盤とする演劇との親和性、モチーフの実見などの、雪岱挿絵の明確な方法論が明らかとなり、雪岱が小説本文を精読した上で作家の意図を正確に把握し、作品世界に相応しい挿絵の作成に努めていることが分かった。
また連載小説が単行本化される際に雪岱の挿絵が利用されることは、同時代における文芸書出版の形態として特異な事象であり、出版元の新小説社社主・島源四郎という人物の果たす役割が大きいことも明らかにした。

研究成果の概要（英文）：A list was created for the first publications for works which had illustrations provided by KOMURA Settai. By carefully examining the relation between Settai’s accomplished illustrations and the text in KUNIEDA Kanji’s novels, the methodology in Settai’s illustrations became clear by understanding the relation between the illustrations and existing pictures, his affinity with the base viewpoint of theatrical stage setting, clear vision of the motif, etc. It can be understood that Settai strived to create illustrations worthy of the novel’s world by reading the text carefully and clearly understanding the author’s intentions.
Also, upon the creation of books for serialized novels, the inclusion of Settai’s illustrations revealed that there was a specific phenomenon in the printing form of the era’s artistic books involving the important role played SHIMA Genshiro, the owner of Shinshosetsu-sha.

研究分野：近代文学

キーワード：近代文学　挿絵　新聞小説　小村雪岱　大衆文学　演劇　装幀　邦枝完二

１．研究開始当初の背景

近代文学研究の場では、近年小説の挿絵を研究対象とする動きが盛んになりつつある。2014 年度昭和文学会秋季大会では「挿絵と文学」がメインテーマであった。また、神奈川大学の松本和也氏主催の「文学と美術研究会」が 2015 年 4 月に発足した（現在では、主として年に二回の研究発表会や資料調査などの活動を進めている）。

2014 年には『名作挿画全集』（昭和 10～11 年）の復刻刊行もあった。また 2009 年埼玉県立近代美術館において開催された「小村雪岱とその時代 粋でモダンで繊細で」展以降、雪岱その人に対する関心も一気に高まり、『芸術新潮』などの雑誌でも特集が組まれることとなった（2012 年 2 月「特集・小村雪岱を知っていますか？」）。

最近でも田中励儀編『初稿 山海評判記』（2014 年 7 月 国書刊行会）、大越久子著『小村雪岱―物語る意匠』（2014 年 8 月 東京美術）といった著書が刊行され、雪岱研究・再評価の気運は高まりつつある時期であったといえる。

２．研究の目的

近代文学においては、挿絵は文の従属物であるという考え方が長らく支配的だったが、申請者は小説を読む際に小村雪岱はじめ諸家の挿絵に接する中で、小説読解の上で挿絵の存在を重要なものと考え、これまで泉鏡花の諸作品と挿絵の関連を軸として研究を続けてきた。雪岱は鏡花と親交篤く、その小説世界を的確に挿絵で表現した画家である。拙論「挿絵の機能―新聞小説としての「山海評判記」」（『論集 昭和期の泉鏡花』2002 年 5 月　おうふう　78～101 頁））では、挿絵が単なる文章の説明ではなく、作家が挿絵から着想を得て執筆した部分もあること、挿絵が小説の空白部分の補足的役割も果たしていることなど、小説と挿絵は互いに影響し合って作品世界を形成していることを明らかにした。また拙論「清方ゑがく「薄紅梅」―〈泉さん〉の物語」（『文学』隔月刊第 5 巻第 4 号　2004 年 7 月　岩波書店　14～26 頁）、「挿絵画家・名取春仙―泉鏡花「白鷺」試論にかえて」（『阪大近代文学研究』第 6 号　2008 年 3 月　1～18 頁））においても、鏑木清方や名取春仙の挿絵を介することによって、文字テキストだけでは気付かないテキスト読解の新たな視点が存在することを明らかにした。

このように、小説の作品世界は一方的に作家側だけが創出するものではなく、絵との関わりを通じて成立する部分も少なくない。挿絵は決して小説の従属物ではなく、それ自体が小説の読み方を左右するものとして、近代文学研究において看過することはできない要素であると考えた。

文学と挿絵の密接な関わりを検討するに当たり、本研究の対象として取り上げたのは、画家・小村雪岱の挿絵である。雪岱の挿絵は今日非常に高く評価されているが、その多くは美術の分野側からの言及に偏るものだった。また、雪岱は文学に造詣の深い画家であるにも拘わらず、その挿絵は小説との双方向の関わりという観点からは殆ど論じられてこなかった。

挿絵は文学の従属物ではなく、小説の新しい読みの地平を切り拓くための有効な手段である。本研究は雪岱の挿絵をモデルケースとして、小説本文と挿絵の相乗的な関わり方について分析し、ひいては文学と美術という異分野交流のあり方を明らかにすることを目的としたものである。

３．研究の方法

(1)雪岱が挿絵を提供した全小説のリスト作成。

主な参考文献は『小村雪岱とその時代 粋でモダンで繊細で』展図録（2009 年 12 月 15 日～2010 年 2 月 14 日、於埼玉県立近代美術館）、『小村雪岱―物語る意匠』（2014 年 7 月 東京美術）とし、適宜漏れがないように同時代新聞や雑誌も参照する。

(2)具体的な作品の読解。

新聞や雑誌などの初出の紙面を全てデータ化する。その際、小説の掲載部分だけでなく、連載期間の紙面の記事すべてに目を配り関連記事もリストアップしておく。新聞連載小説の場合、読者からの反響を投書などの形で掲載したり、作家・画家が自身の作品について語ったりすることもあり、それらも作品を読む上での貴重な資料となる。

初出において絵と文はどのように関わっているのか、挿絵一葉ごとに詳細な検討を重ね、そのパターンや問題点など列挙したのち、論文に発展させるべくそれらを整理・体系化してゆく。

(3)単行本化されたテキストとの比較。

新聞（雑誌）に連載された小説は、単行本

化の際に挿絵が捨象され、文字テキストのみとなることが多いが、雪岱の場合は単行本にも連載時の挿絵が使われたり、装釘にも関与することがある。雪岱の仕事が使い捨てで終わるものではないと捉えられていたことの証左ともなる事例であり、テキスト周辺の諸資料とも併せて、多角的に絵と文の関わりを検討する。

(4)東京美術学校における文学活動の調査。

雪岱の文学的素養を育んだ背景として、その出身校である東京美術学校の学生による文学的な活動の実態を明らかにしてゆく。

拙論「資料紹介・東京美術学校日本画科卒業制作「外科手術」―鏡花作品受容の一側面―（『女子大国文』第151号 77～88頁 2012年9月）では、泉鏡花の初期小説「外科室」を素材として、東京美術学校日本画科の卒業課題を制作した葛揆一郎という人物の「外科手術」なる絵画の存在を明らかにした。同様に特定の小説を卒業制作の素材とした日本画専攻の学生は管見によれば四名、小村雪岱の卒業制作「春昼」もその中に含まれ、鏡花の小説「春昼」を画材としたものである。当時の美術学校における文学熱のあり方は『東京美術学校校友会月報』（明治35～昭和7年刊行）に詳しいため、東京芸術大学所蔵の当該資料を調査対象とする。

美術学校時代の雪岱を取り巻く状況は、彼が小説の挿絵画家として大成するための必然的背景であり、調査しておく必要性があると考える。

(5)雪岱以外の挿絵画家のケースにも目を向ける。

「文学と美術研究会」の松本和也氏は、数年前より信州大学附属図書館が所蔵する石井鶴三（中里介山「大菩薩峠」の挿絵を担当）の書簡資料を多数所蔵している。小説家と挿絵画家の実際の関係のあり方や同時代の挿絵と小説を取り巻く状況を知ることのできる貴重な資料であり、雪岱挿絵を研究する上でも有効な資料となるため、必要に応じて信州大学にも赴き当該資料の閲覧・調査を行なう。

(6)新聞連載小説の本文と挿絵の問題についての、より多角的な考察。

雪岱挿絵と小説の関係を研究することは、今日に至る新聞連載小説における絵と文の関係を考察する糸口ともなり、本研究を通じて、作家と画家のみではなくそれを享受する立場としての読者も含めた、作家・画家・読者によって生成される読書の場のあり方を研究することにもつながると考える。幅広い時代（新聞連載小説に挿絵画家の名前が作者に併記されるのは大正期以降であるため、考察対象は大正から平成にかけての範囲とする）の新聞連載小説において、連載開始時に新聞に掲載された作家・画家の言説、または新聞社側が掲載した広告文、あるいは連載小説を原作として演劇化・映画化されるケースなど、様々な情報を収集・データ化し、研究の次の段階への準備資料とする。

４．研究成果

(1)概要

① 小村雪岱が挿絵を提供した小説の初出収集を行った。購入が可能なものは初出掲載誌を古書店で購入し、それが困難な場合は諸機関が所蔵している資料より当該箇所を複写し、それに替えることとした。複写したものはいずれもスキャンしてデータ化を行い、紙媒体と共に保存した。

② ①で入手した小説作品の目録作成を私に行った。入手できなかったものや確認できなかったものについては、他の雪岱研究者との連携（埼玉県立近代美術館の大越久子氏、装幀家の真田幸治氏からご助言や資料の閲覧に関するご高配を頂いた）により、データを補足した。目録は今後も適宜追加修正を行ってゆく。

③ 雪岱挿絵の代表作と目される邦枝完二の小説作品「おせん」「お伝地獄」を中心に、具体的な作品のテキスト読解を行い、その作品構造や意義の解明に努め、小説本文と挿絵との有機的な関連のあり方について考察を進めた。

その過程で、雪岱挿絵は明確な方法論に基づいて作成されたものであることが分かった。

③-1　雪岱が既存絵画を挿絵作成の参考にする際、それは小説本文の意味内容に即した挿絵を描くために必然的に選び出された図像であることが分かった。

③-2　雪岱挿絵の方法論については、演劇的な要素を念頭に置いたものが存在することも判明した。また「お伝地獄」舞台化（昭和10年4月新宿歌舞伎座）の際、雪岱挿絵の原画展が劇場で開催されたことを示す記事（昭和10年4月26日付『読売新聞』）が見つかった。これは小説･挿絵・

演劇という異分野同士の融合における挿絵の利用法として大変興味深いものであるといえる。

④ 新聞連載小説が単行本化される際、初出の雪岱挿絵が単行本に収録されるケースは複数あることがわかった。これは小説における挿絵の重要性を示すと共に、昭和初期の文芸書出版のあり方を考える上で重要な事例である。

⑤ ③④の具体的な成果については、論文ならびに研究会を通じて発表を行った。以下に得られた成果をまとめた主要な論文ならびに研究会での発表内容の詳細をそれぞれ述べる。

(2)成果

① 論文「邦枝完二と小村雪岱―「おせん」の小説挿絵を読む―」(『語文』106・107 合併号，2017 年)

・大衆小説作家としての邦枝完二の生い立ちおよび作家としての活動内容についての調査を行った。邦枝に関する先行研究は伝記研究・作品研究ともに皆無であり、今回邦枝の長女木村梢氏の著作など新資料も明らかにしたが、作家に関する基礎研究は今後も継続して行う必要があることが明らかになった。

・雪岱は挿絵を描く際に、鈴木春信（1725-1770 カ）や月岡芳年（1839-1892）らの既存絵画にその典拠を求めており、それらは単なる敷き写しではなく、小説本文の内容に即した挿絵を描くための、明確な方法論意識に基づいたものであることが明らかになった。(図 1、図 2 参照。いずれも恋ゆえの狂乱に陥った女性を描いた図像。)

図 1・「おせん」第 58 回挿絵

・邦枝と雪岱における文と絵の関係性を明らかにするためには、「息のあったコンビ」という一般的な表現に留まらず、雪岱が小説をどのように読み解いた上で挿絵を描いているのかという、方法の必然性に切り込む視点が今後も必要であることが明らかになった。

図 2・月岡芳年「和漢百物語　清姫」(慶應元年)

② 論文「『絵入草紙おせん』に関する諸問題―昭和初期における文芸書出版の一形態―」,『阪大近代文学研究』14・15 合併号，2017 年)

・邦枝完二の新聞連載小説「おせん」を単行本化した『絵入草紙おせん』は、島源四郎を社主とする新小説社から出版されたものであり、本書には連載時の雪岱挿絵が全点収録されている。調査の結果、こうした出版形態は当時としては珍しいものであり、島が関心を寄せていた出版形態であることが分かった。

・雪岱と島源四郎および新小説社との関わりを調査し、両者の親交の深さ、島が木版画を活かした美本造りにこだわりを持っていたことなどを明らかにした。新小説社から刊行されたその他の雪岱装釘本も、単なる美装本としてではなく、小説の内容とどのように切り結んだ装釘・挿絵であるのかを調査する必要があることも分かった。

・本書に収録された挿絵のうち、三枚は初出時の挿絵を描き直し差し替えられたものであることが判明し、描き直しの背景には、雪岱の小説に対する深い読解力と演劇への親和性が存在していることが明らかになった。

図 3・初出挿絵

図 4・単行本挿絵

一例として、小説本文の同じ箇所を描いた図 3 と図 4 を比較した場合、初出の図 3 は建物前後の奥行きを、単行本で差し替えられた図 4 は人物による左右の動きを、それぞれ意識したものと思しい。これは当時芝居における舞台装置家としても活躍していた雪岱ならではの視点であり、同時代の小説や挿絵が、演劇という媒体と無関係ではないことを示唆しているのだと考えられる。

③ 研究発表「邦枝完二「お伝地獄」の新聞小説挿絵を読む」(共同研究会「新聞のなか

の文学」2016 年 8 月 5 日，大阪大学」

・①②同様に、「お伝地獄」においても雪岱挿絵の方法論には、既存絵画の摂取や演劇との関連といった要素が指摘できることを明らかにした。特に演劇との関連という観点からは、人物の動きを一連の挿絵で連続的に表現しようとする意図が看取された。

図 5

図 6

図 7

図 8

図 5～8 は、定点で追った人物の連続的な動きを描いたものであり、これは演劇的な視点であると同時に、同時代急速に台頭する映画という新興の媒体の影響とも不可分ではない方法だと考えられる。

雪岱は小説本文に対する確かな読解力のみならず、演劇や映画といった文学との隣接分野への関心も同時に抱き、挿絵を創作していることが分かった。

・小説「お伝地獄」における重要なモチーフとして、お伝が背中に刺青を彫るエピソードがあり、雪岱はこの場面を描く際実際に邦枝の紹介で知遇を得た彫り師の元を何度も訪問し、その仕事ぶりを観察していたことも諸資料から明らかになった。画家としての確かな観察眼によって生み出された挿絵はリアリティを備えたものであり、雪岱挿絵の魅力の一つになっている。

埼玉県立近代美術館の岩城コレクションに収録されている雑誌挿絵を調査した結果、雪岱は他にも刺青を題材にした挿絵を何点か描いていることも判明した。小説一編のストーリーに沿ったものとして挿絵の意図を検討すると同時に、いくつかの小説作品に共通して現れるモチーフに、雪岱が如何に関心を示し、どのように挿絵を描こうとしているのか、引き続き調査と考察が必要であることも確認した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

※発表はすべて杲（旧姓）名義である。

①杲 由美，『絵入草紙おせん』に関する諸問題―昭和初期における文芸書出版の一形態―，『阪大近代文学研究』，査読あり，14・15 合併号，2017 年，p.○○～○○（未定）

②<u>杲 由美</u>，邦枝完二と小村雪岱―「おせん」の小説挿絵を読む―，『語文』，査読あり，106・107 合併号，2017 年，p.124～144

〔学会発表〕（計　２件）

①<u>杲 由美</u>，邦枝完二「お伝地獄」の新聞小説挿絵を読む，共同研究会「新聞のなかの文学」，2016 年 8 月 5 日，大阪大学（大阪）

②<u>杲 由美</u>，邦枝完二「おせん」―小村雪岱の挿絵を読む，文学と美術研究会，2016 年 3 月 19 日，コラボ産学官（東京）

６．研究組織

(1)研究代表者

新井　由美（ARAI Yumi），大阪大学，文学研究科，助教

研究者番号：40756722

(2)研究分担者

なし

研究者番号：

(3)連携研究者

なし

研究者番号：

(4)研究協力者

なし